

2023年5月7日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

創世記 15 : 5~6

ローマの信徒への手紙 3 : 21~26

「信仰によってのみ」

(ハイデルベルク信仰問答 第二部 問 59~61) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

【前奏】

【招詞】 マタイによる福音書 11 : 28

【祈祷】

【聖書】 創世記 15 : 5~6、ローマの信徒への手紙 3 : 21~26

【説教】 「信仰によってのみ」

<使徒信条を信じること>

毎週、『ハイデルベルク信仰問答』から聖書の御言葉を聞いています。これまでは、教会が信じていることを言い表した「使徒信条」について、言葉の一つ一つが読み解かれてきました。今回は「使徒信条」の最後のところ、「身体のみがえり」と「永遠の命」についてでした。それで、今回の問答 59 以下は、全体のまとめのようなどころとなっています。

問 59 は、このような問いです。「それでは、これらすべてを信じることは、あなたにとって今どのような助けになりますか。」

「これらすべてを信じること」とありますが、それは、これまで学んだ「使徒信条」で告白されているすべてのこと、という意味です。使徒信条のすべてを信じること。これは、あなたにとって今どのような助けになるか。

答えはこうです。「わたしが、キリストにあって神の御前に義とされ、永遠の命の相続人になる、ということです。」

信じることによって与えられる助けの一つは、キリストにあって神の御前に義とされることです。神さまの御前に義とされるとは、神さまに背き、離れ、罪を犯していたわたしが、その罪を赦され、神さまの方を向くようになり、神さまとの正しい関係に生きるようになること。神さまを愛し、神さまを礼拝して、神さまと共に生きる者となることです。

そして、もう一つは、永遠の命の相続人になる、ということです。永遠の命とは、永遠にいます神さまと共に生きる命、ということです。その命を受け継ぐ。神と共に、神の子として、生きる者となる、ということです。

「使徒信条」に告白されていることを信じることは、わたしたちがそのような恵みを受け取って、今、その恵みを助けとして、支えとして、生きる者となる、ということであり、これこそ、わたしたちの救いなのです。

<信仰によってのみ>

そのうえで、『ハイデルベルク信仰問答』の間 60 は、「どのようにしてあなたは神の御前に義とされるのか」ということを問うています。そして、その答えは、「ただイエス・キリストを信じる、まことの信仰によってのみです」となっています。

わたしが、神の御前に義とされるのは。つまり、わたしたちが罪を赦され、救われるのは、イエス・キリストを信じる、まことの信仰によってのみである。「信仰によってのみ、義とされる」。これは、わたしたちプロテスタント教会の、「信仰義認」と言われる、最も重要な事柄の一つです。

信仰問答の間 60 は、この「信仰によってのみ、義とされる」ということを、とても慰め深い言葉で語っています。間 60 の答えは、他と比べて長めの文章ですが、これがまるで一つの小さな説教のようです。また是非繰り返し読んで、味わっていただきたいと思います。

<良心の責め>

さて、「信仰によってのみ義とされる」。「使徒信条」の学びの終わりに、この問答がどうしてこのことを特に強調しているのか。それは、このことが宗教改革において、プロテスタント教会が主張した最も大切なことの一つであり、要（かなめ）となることだからです。

宗教改革以前は、教会において、罪人が救われるためには、イエスさまの救いを信じる信仰と、さらに、それぞれの行ない、善い業が必要である、と教えられてきました。

しかし、宗教改革の立役者であるマルティン・ルターは、かつて修道士であった時に、どんなに努力して、熱心に善い業を行なっても、自分の罪深さを思えば、それが自分の救いにとって何の足しにもならない、ということに深く悩んでいました。どれだけ自分が頑張っても、励んでも、神さまが望んでおられる正しさに達することが出来ないのです。

ですから、どうやっても、何をしても、自分を最後に待ち構えているのは、神さまの怒りであり、裁きであり、滅びである。そんな恐怖から、逃れることができませんでした。

間 60 の答えの前半に書かれていることは、まさにそのように、救いを求める人の心の葛藤の声です。こうありました。「わたしの良心がわたしに向かって、『お前は神の戒めすべてに対して、はなはだしく罪を犯しており、それを何一つ守ったこともなく、今なお絶えず悪に傾いている』と責め立て」と。

自分の中のどうしようもない罪深さ。どうしようもない弱さ。どうしようもない悪。どうやっても、神さまに完全に従うことが出来ない。神さまを愛し、隣人を自分のように愛することができない。そのような罪の現実を、わたしたちも確かに知っています。

もし救われるために、自分の善い業が必要だと言われるなら。わたしたちは、神さまが求めておられることを満たすことが出来ない、自分の罪深い現実に、絶望するしかないのです。

「お前は神の戒めすべてに対して、はなはだしく罪を犯しており、それを何一つ守ったこともなく、今なお絶えず悪に傾いている」。この良心の声は、決して極悪人の心の声ではありません。神さまに従おうとする、救われたいと願う、まじめで、熱心で、努力家である、一人の信仰者の心の声。自分の罪と向き合う者の、心の叫びなのです。

<神の救いは、ただ恵みによって>

…しかし本当は、聖書がずっと教えていたことは、問 60 の答えの後半にあることでした。こうあります。「神は、わたしのいかなる功績にもよらず、ただ恵みによって、キリストの完全な償いと義と聖とをわたしに与え、わたしのものとし」て下さる。

ルターは、聖書の御言葉と真剣に向き合う中で、本来、語られていたこのことを、再発見したのです。聖書には、善い業が自分を救うなどとは書いていない。救いは、いかなるわたしの功績にもよらない。神さまは、ただ恵みによって、救ってくださる。神さまが、ただ恵みによって、キリストの完全な償いと義と聖とを、わたしに与えてくださる。

わたしには何もできない。だからこそ、イエスさまが来られ、救いの御業を成し遂げて下さり、罪人のわたしに正しさを、神の義を、与えて下さったのです。

良心の声がどれだけわたしを責めても、それを覆い尽くす、神の救いの言葉が響きます。

問 60 の答えの後半の全体を読みます。「神は、わたしのいかなる功績にもよらず、ただ恵みによって、キリストの完全な償いと義と聖とをわたしに与え、わたしのものとし、あたかもわたしが何一つ罪を犯したことも罪人であったこともなく、キリストがわたしに代わって果たされた服従をすべてわたし自身が成し遂げたかのようにみなしてください。」

何もできない、罪人のわたしのために、神さまがわたしたちを救って下さいます。

そのために、神さまは御子イエス・キリストを遣わし、この方が、あらゆることにおいて、わたしに代わって下さったのです。キリストがわたしの代わりに罪を背負い、キリストがわたしの代わりに裁きを受け、そしてわたしには成し遂げることのできない、神さまへの完全な服従を、キリストが成し遂げて下さいました。

そして神さまは、それをまるで、わたしが成し遂げたかのようにみなして下さる、というのです。まるで、わたしが罪を犯したことも、罪人であったこともなかったかのように。まるで、わたしが神さまに完全に服従したかのように。まるで、わたしがキリストのように正しい人であったかのように、みなして下さる。

それが、「わたしが、キリストにあって神の御前で義とされ」る、ということなのです。

ルターは、このことを「喜ばしい交換」と呼びました。神の御子であったイエスさまが、まことの人となり、罪人のわたしと一体となり、あらゆるものを交換して下さったのです。

イエスさまは、わたしの罪を、ご自分のものに。わたしが受けるべき神の怒りを、ご自分のものに。わたしの裁きを、ご自分のものに。わたしが架けられるべき十字架の呪いの死を、ご自分のものにして下さいました。

そしてわたしたちは、イエスさまの神の子の身分を、わたしのものに。イエスさまの従順を、わたしのものに。イエスさまの永遠の命と復活を、わたしのものに。イエスさまの正しさを、義を、聖さを、わたしのものにしていただいたのです。

この交換のために、わたしは何を差し出す必要もありませんでした。いや、何も差し出せるものがないのです。たとえ自分の命を差し出しても、神の義をいただくには足りません。

それなのに、わたしたちがイエスさまの義をいただくために、イエスさまに渡したものは、なんと、わたしたちの罪と、裁きと、呪いの死だったのです。

しかし、イエスさまは、それを喜んでご自分のものとして引き取って下さいました。そして、ご自分の命によって、わたしのために神の義を獲得して下さい、それを与えて下さるのです。そうして、イエスさまの完全な罪の償いと、義と、聖とが、ただ恵みによって、この罪人のわたしに与えられる、というのです。

今日読まれたローマの信徒への手紙 3：23～24 にはこうありました。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」

「ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされる」。

これが、わたしたちに与えられている救いです。神さまが、イエスさまの贖いの御業を通して与えて下さる完全な救いに、わたしたちの取るに足りない善い業を、付け足す必要はありません。

神さまは、わたしを正しい者として下さるために、イエスさまが十字架の苦しみと死によって獲得して下さい「神の義」を、無償で、ただ恵みによって、憐みによって、愛によって、わたしに与えて下さるのです。

<信仰がわたしを救う???>

では、わたしたちはどうしたらよいのでしょうか。

わたしたちは、その無償で与えられた神の義を、ただ心から受け入れるだけです。

御子イエスさまが、十字架の贖いによって成し遂げて下さった、罪の赦しを、救いを、神の義を。わたしたちは福音によって、神さまの御言葉によって、知らされ、教えられ、目の前に差し出されます。わたしたちは、それを、心から大切に受け取るだけなのです。

救いとは、わたしたちが何とかして得るものではありません。救いとは、神さまが与えて下さるものであり、わたしたちが神さまから、ただ受け取るものなのです。

ですから、問 60 の答えの最後にはこうありました。「そして、そうなるのはただ、わたしがこのような恩恵を信仰の心で受け入れる時だけなのです。」

ここで、『ハイデルベルク信仰問答』は、問 61 で、「信仰によってのみ」ということの意味を、よりはっきりとさせようとしています。

なぜなら、時にわたしたちは「信仰によって」と言われた時に、「信仰」は、わたしの信じる気持ち、信じる心であり、それがわたしを救う、と思っていることがあるからです。

時々、わたしたちはこんなことを言います。「あの人の信仰は立派だ」、「あの人の信仰は素晴らしい」、「あの人は強い信仰を持っている」。一方で、「わたしの信仰はだめだ」、「わたしの信仰は弱い」、「わたしは信仰が薄い」、「信仰を失いそうだ」などと言ったりもします。

でも、わたしたちの「信じる思い」の強さ、弱さが、わたしたちを救いに近づけたり、遠ざけたりするものではありません。「信仰」は、わたしの心次第で、持ったり、失ったりするものではないのです。もし、そう考えているなら、「信仰によってのみ」と言っても、やはり救いは、自分にかかっている、自分の心の思い次第だ、ということになります。

それではまるで、「信じる」ということが、自分の善い業であるかのようです。

でも、そうではありません。「わたしのいかなる功績にもよらず、ただ恵みによって」神の義は与えられる。ただ恵みによって、救いは与えられているのです。

問 61 は、そのことを語っています。問いを見てみましょう。「なぜあなたは信仰によってのみ義とされる、と言うのですか」。答えはまず、「それは、わたしが自分の信仰の価値のゆえに神に喜ばれる、というのではな」い、と語っています。

ここに、「自分の信仰の価値ゆえに神に喜ばれる」のではない、とあります。

つまり、「信仰」はわたしの功績、わたしの善い行いではありません。「信じる」ことが、わたしを「義」とするのではないのです。

答えの続きに、「ただキリストの償いと義と聖だけが、神の御前におけるわたしの義なのである、とあるように、わたしたちを「神の御前で義」とするのは、イエスさまの償いと義と聖だけです。

わたしたちを救うのは、イエスさまが成し遂げて下さった十字架と復活の御業のゆえであって、わたしの「信じる心」や「信心深さ」のゆえに、神さまがわたしを救って下さるのではないのです。

わたしたちの救いは、わたしたちに与えられる「神の義」は、イエスさまにのみある。『ハイデルベルク信仰問答』は、このことを繰り返し強調しているのです。

今日の、ローマの信徒への手紙 3 : 25 にはこうありました。「神はこのキリストを立て、その血によって信じる者のために罪を償う供え物となさいました。」

神は、このキリストを立てられ、罪を償う供え物となさった。

そうです。神さまの御前に、イエスさまが立って下さいました。わたしが直接、神さまの御前に立つものではありません。とてもではないけれど、罪に汚れているわたしたちが、神さまの御前に立つことは出来ません。だから、イエスさまが立てられたのです。この方が、わたしの代わりに神さまの御前に立って、わたしに向けられた神さまの怒り、罪の裁きを、代わりに引き受けて下さった。

そして、この方がわたしの代わりに、完全な服従をもって、完全な正しさをもって、神さまの御前に立って下さった。罪人のわたしが神さまの御前に立てるように、ご自分の正しさで、神の義で、罪人のわたしを覆って下さいました。わたしたちは、イエスさまの義をまもって、やっと神さまの御前に立つことが出来るのです。

そのように、イエスさまが、神さまと、わたしたちの間に立って下さることによって、わたしたちは罪の裁きを免れ、神さまの御前に正しい者とされ、義と認めていただいたのです。イエスさまだけが、神の義を、救いを、わたしに与えて下さるのです。

<受け取ること>

では、「信仰」とは、一体何なのでしょう。「信仰によってのみ義とされる」とはどういうことなのでしょう。

問 62 の答えの後半にはこうあります。「わたしは、ただ信仰による以外に、それを受け取れることも自分のものにもすることもできないからです。」

つまり、信仰とは、イエスさまがわたしのために獲得し、与えて下さった神の義を、受け取ることなのです。受け取って、自分のものにもすることなのです。

神さまが、イエスさまによって「神の義」というプレゼントを、わたしたちに差し出して下さいました。それを受け取って、はじめてプレゼントは「わたしのもの」になります。

差し出されたものに対して、手を引っ込めて、そっぽを向いて、拒否するのであれば、それは当然、「わたしのもの」にはなりません。

イエスさまが成し遂げて下さったことを、わたしの救いとして受け入れること。この方が、わたしのために神さまの御前に立って下さり、わたしのために罪を贖って下さり、わたしのために死んで下さり、わたしのためによみがえって下さった。この方が、わたしのために神の義を獲得して下さり、わたしのために無償で与えて下さった。

それをただ、心から感謝して受け取ること。神さまから差し出されたプレゼントを、確かに自分の救いとして、受け取ること。それが、信仰なのです。

でも、プレゼントを受け取ることそのものは、わたしの善い業でも、功績でも、何でもないので。

「信仰によってのみ、義とされる」。ですから信仰とは、わたしたちが自分の救いのために、何かを神さまに差し出すことではありません。むしろ、自分の手を空っぽにして、神さまが与えて下さる救いを、神の義を、すべての恵みを、しっかりと受け取ることなのです。

その、救いを受け取ることのしるしが、イエスさまを、わたしの主、わたしの救い主と告白し、洗礼を受けることなのです。

神さまは、わたしたちを愛して下さるゆえに、イエスさまによって、「神の義」を与えて下さいました。神さまは、それをただ恵みによって与えて下さり、わたしたちは、それをただ信仰によって受け取るのです。

この救いを受け取ったわたしたちは、そこから、神さまの愛に応えていく歩みが始まります。わたしたちの善い業は、自分を救うためではなく、神さまがただ恵みによって、無償で救って下さったゆえに、感謝に溢れて、神さまの愛にお応えし、神さまに喜ばれる歩みをしたいと願うことによって、なされていく業なのです。

救われるために善い業をするのではなく、救われたから、そのことを感謝して、喜んで、善い業に励むようになる。それが、プロテスタント教会における「善い業」の位置づけなのです。

わたしたちは、善い業によって、自分から救いに近づいたり、神の義を獲得したりすることは出来ません。わたしたちを義として下さるのは、救って下さるのは、ただイエスさまだけです。罪人のわたしたちは、イエスさまによって与えられる神の義を、差し出された救いを、ただ喜んで受け取るしかありません。

でも、そうやってわたしたちが、ただ救いの恵みを受け取ることをこそ、神さまは望んでおられ、また心から喜んで下さいます。

そして神さまは、プレゼントを受け取ったわたしたちを、罪人ではなく、イエスさまを通して正しい者として見て下さり、「義」と認めて下さり、ご自分の愛する子どもとして、神さまの恵みをすべて受け継ぐ者として、大切に受け入れて下さるのです。

「信仰によってのみ、義とされる」。わたしたちは、イエスさまが与えて下さる義を、神さまからの愛に満ちたプレゼントを、心を開いて、両手を広げて、心からの感謝と喜びをもって、受け取りたいのです。

【お祈り】 天の父なる神さま

罪に捕らわれているわたしたちのために、御子イエスさまが、十字架と復活によって救いの御業を成し遂げて下さり、わたしたちのために「神の義」を獲得し、そして無償で、わたしたちにそれを差し出して下さいました。

すべては、神さまがわたしたちを愛して下さり、憐れんで下さり、共に生きることを望んでくださったゆえです。ただ、恵みによってです。わたしたちに、そのような驚くべきプレゼントを、イエスさまの十字架の死による贖いと、義と、聖とを与えて下さいますことを、心から感謝いたします。

わたしたちは、自分の罪深さを認め、悔い改め、ただそのプレゼントを受け取ることしか出来ません。どうかわたしたちに、イエスさまの救いを受け入れさせ、救いをわたしのものとさせて下さい。聖霊によって、まことの信仰を与え、イエスさまが成し遂げて下さったことが真実であると確信し、心から信頼し、受け入れさせて下さい。

このお祈りを、イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 449 「千歳の岩よ」

【信仰告白】 使徒信条

【長老任職式】

【聖餐】 【讃美歌】 78 「わが主よ、ここに集い」

【献金】 【主の祈り】

【讃美歌】 24 「たたえよ、主の民」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、
あなたがた一同と共にあるように。アーメン